

柔軟な教育システムに係る懇談会（第2回）の概要

- 1 日 時 平成18年8月18日（金）午前9時30分～午前11時20分
- 2 場 所 ルビノ京都堀川 「ひえい」の間
- 3 出席者 委員：8名（代理1名を含む）
東晴康、伊坂はるみ、稲富哲哉（代理：濱田高野中学校長）、小寺正一（座長）、
塩見均、下田敏晴、高畑哲、田中守 の各委員
事務局：森永高校改革推進室長 他7名
（傍聴者：5名）

4 内 容

- (1) あいさつ 教育庁指導部高校改革推進室長
- (2) 事務局からの説明
- ・ 第1回懇談会の概要
 - ・ 長期欠席者特別入学者選抜の実施状況
（実施校である朱雀高校の状況について、高畑・伊坂両委員から補足説明）
- (3) 意見交換 『柔軟な教育システムの基本的な考え方について』

中学校卒業後、集団生活になじめないため高校へ普通に行くことができず、社会で活動することもできない生徒に、何とか学ぶ場所を確保してほしい。

高校が義務教育でない以上、ある程度の学力が要求されるのはやむを得ないが、意欲や適性等も含めて柔軟に対応してほしい。

単位や出席日数などを柔軟にし、社会性を身に付けられるシステムが必要。

高校で取得できなかった単位について、在学中に受験できる高校卒業程度認定試験を併用して卒業単位として認められないか。

現在のシステムでは、必要な出席日数を割った時点で学校から足が遠のき生活が乱れるため、翌年再スタートするのは難しいが、例えば2学期制で後期からの単位を認めることや別室登校を評価するなどして学校から離れないようにできないか。

生徒集団の作り方に配慮し、友人間で励まし合える形にすることが望ましい。

定時登校できなくても途中からの登校が受け入れられるシステム、必ずしも系統的な学習にはこだわらないような教育課程の編成や単位の互換、ボランティア活動等いわば社会に直結した形での選択科目の設定や、集中講座、原級留置無しの無学

年制など、生徒の実態に応じたシステムを作るべき。

現在の定時制・通信制は全日制に比べ柔軟な部分もあり、そこに居場所を見つけていきいきしている生徒もいる。それぞれのシステムの有効性、利点を生かしながらニーズを絞り込んだ上で、全日制に新しいシステムをつくれないうか。

卒業まで引っ張っていけるという見通しを持てるシステムであるべきで、引きこもり状態の生徒を受け入れるのは困難。そして、生徒自身が誇りを持てる学校にするため、一定のハードルを設け達成感を持って卒業させるべき。

単位制は単位を少しずつ蓄積すれば卒業できる点で選択肢に入ると思うが、定時制通信制の在り方も含めて府全体としてシステムの位置づけを考える必要がある。

卒業程度認定試験の併修は、怠学に結びつき、学習集団としての機能を保てない場合も予測され安易に認められない。一定の歯止めをかけながら集団の中で学ばせ、単位認定すべき。新しいシステムでは要卒業単位数を74単位に引き下げ、1日6時間授業の中で2時間目からの登校を認めるなど、幅を持たせて履修させる形態が考えられる。うやむやに卒業させるのでは教育機能が果たせない。

集団適応の力を上げたり社会性を高めたりするような簡単なノウハウは無いし、それを本人や家庭に任せた状態では期待できない。高校や大学を卒業したからといって社会性が身に付いたとも言えない。社会性のないまま社会にたくさん出てくる状況で、どこかが軌道修正しなければならない。不登校にも強い子と流れにのってだらだら行く子があり、色々な面を見ないと柔軟さに段階をつけるのが難しい。

中学校は、思春期に入り自我が芽生える時期なので、不登校が多いのは事実で、本人はもちろん、保護者に対しても色々な取組をしているが、一つの有効な取組がすべての子どもに通用しない難しさがある。

今回は主としてどういう生徒を対象とするのか、それを考えるヒントをいただいた。新しいシステムは生徒が誇りを持てる学校にし、受け入れた以上はきちんと最後まで責任を持つべきとの指摘があった。究極的には、高等学校の役割は何か、という問題でもあるが、基本的な集団の中で学び、お互い切磋琢磨するという役割を崩してまで柔軟性を保障するのかという考え方もある。既存の高等学校の制度があり、その役割はきちっと押さえるべきと思うが、新しい社会の在り方の中で、対応しなければならない問題が出てきた結果、これまで積み重ねてきた学校のシステムが大きく崩れ、その役割が果たせず、良さがなくなってしまうようなことがあってはならない。今後、何を付け加えていくのか、そして具体的にどんなカリキュラムを組み、単位の認定の仕方とか単位数をどのような形にするのか、次回の場でももう少し具体的にお話をいただければと思う。

5 次回懇談会の開催日程

平成18年9月11日(月)午前9時30分から11時30分まで
ルビノ京都堀川 「アムール」